

第6話 リキシャのサニー

インドではいつもアルワリアの運転するタクシーに乗っていましたが、街なかではオートリキシャと呼ばれるオート三輪車の荷台に人を乗せる乗り物があります。これはホテルの玄関には入れないので、ホテルから外の道に出るとワーという感じで寄って来ます。何処に行くのかと聞かれますから、買い物をしたい店の名前を言うとほとんどの運転手は「今日そこは休みだから他の店に連れてってやる」と言うのです。自分の知っている店に客を連れて行けばなにがしかのお金が貰えるのでこう言うのですが、休みでもかまわないから行ってくれという結局出発し勿論店はあいているのです。

ここで嘘をつかれたと怒る人はインドに向かないかもしれません。オートリキシャの運転手にすれば、『そんなの嘘に決まっている訳で、それでも行ってくれというからそこでこの話は終わり。ちゃんと乗せてきたのだからそれで文句をいうなんて』ということなのみたいです。

このオートリキシャの他に自転車の荷台に人を乗せて走るリキシャというのがあります。リキシャの運転手はいずれ自分もオートリキシャの運転手になって稼ぎたいというのが夢という両者の関係になります。

このリキシャの運転手でネパール出身のサニーという男と友達でした。オールドデリーの車も入れないような狭い路地裏をサニーのリキシャで走り回っていました。狭い路地の両側にはあらゆる種類の店がびっしりと軒をならべ人でごったがえしているのですがそれを避けながら走るのとはとてもエキサイティングでした。

サニーには三人の子供がいるので文房具や奥さんに化粧品などのお土産を持ってきたりしていたのですが、サニーが「いつも自分は貰うばかりでお返しをするものがない、一度家に来ていただいてお茶を差し上げたい」というのです。僕達はそう言われてもペダルを踏む彼のごつい足と汗ばんだ背中を見ながら正直返事ができませんでした。

ところがある日また同じように彼に言われて僕らが返事をしづっていたら、彼が「自分はいつもお願いしているのに返事をしてもらえない」とつぶやくのです。エーイもう黙ってはいけない、かなり不安があったのですが一大決心をしてサニーの家を訪問することにしたのです。 つづく

